

調査報告

農薬関連の講義におけるいくつかの試みと その受講生による記述文

鳥根大学生物資源科学部 ^す ^{やま} ^{こう} ^{すけ}
巢 山 弘 介

はじめに

筆者は農薬に関する情報伝達のより良い形を模索するため、これまで後述するいくつかの試みを取り入れた講義を行い、その概要や受講生の反応について各種の学会で報告した(巢山ら, 2013; 2014; 2015 a; 2015 b; 巢山, 2016)。そして、それらの内容などを取りまとめ、社会心理学的な視点での考察を試みた(巢山, 2017)。ただ、その中では受講生による記述文について断片的にしか紹介せず、彼らの反応をリアルにお伝えできなかった。そこで、本稿では、農薬関連の講義における筆者の試みについて概略を述べた後、できる限り多くの記述文をそのまま紹介したい。つまり、本稿は既報(巢山, 2017)の資料編のような位置づけであり、そちらも併せてお読みいただければ幸いである。

I 農薬関連の講義における「四つの試み」

筆者は、担当または分担している複数の講義科目において、近年、主に次の四つを試みている。

1. 架空の農薬候補物質(試験名 AKB-48)が開発され、農薬取締法第三条に規定されている登録保留要件をクリアして登録に至る過程を解説した後、実際の農薬の残留状況などを示す。また、登録保留要件を「ハードル」、登録に至る過程を「デビューへの道のり」と比喻する等、全体的に「物語・たとえ話」になっている。
2. それらの過程に「携わる人々」をイメージさせるイラストなどをスライドの随所に付す。
3. 「多くの(試験)、厳しい(基準)、安全性が確認・確保されている、大丈夫」等の、また、携わる人々の「配慮、努力、苦労」等の主観的な語句は用いない(それらの反意語も)。
4. オーディエンス・レスポンス・システム(以下、クリッカー)を用いて農薬に関する基礎知識やリスクへの許容度等を受講生に問い、回答分布を示しながら双方

向的に進行する。なお、クリッカーとは、電卓のようなテンキー端末をあらかじめ受講生に配布しておき、講義中に質問と選択肢を示していずれかのキーを押してもらおうと直ちに回答分布が投影されるシステムである。

II 教養育成科目における講義 「農薬のリスク管理」

1 講義の概要

鳥根大学には「環境問題通論 A」および「環境問題通論 B」という教養育成科目がある。前期の A と後期の B はほぼ同じ内容で、学生は片方しか履修できない。それぞれ全 15 回(各 90 分間)の中で環境や健康等にまつわる講義を 10 名の教員がオムニバス形式で担当している。その一つとして筆者は「農薬のリスク管理」と題した講義を上述の試みを取り入れて行ってきた。その概要は下記の通りである。詳細な内容、クリッカーの設問や回答分布等については既報(巢山, 2017)を参照していただきたい。

- (1) 主な農薬の種類・製剤・処理法
- (2) 開発プロセス(分子設計、合成、効果の評価、製剤設計等)
- (3) AKB-48 デビューへの道のり(1): 作物における農薬残留基準のクリア
- (4) デビュー後のリスク管理(使用基準の順守義務と罰則、農家への指導等)
- (5) デビュー後のチェック(トータルダイエット調査の概要と結果等)
- (6) AKB-48 デビューへの道のり(2): 水産動植物への被害防止に係る農薬登録保留基準のクリア
- (7) デビュー後のリスク管理(使用上の注意の表示義務、農家への指導等)
- (8) デビュー後のチェック(農薬残留対策総合調査の概要と結果)
- (9) 農薬の変化の例(選択性殺虫剤、溶出制御製剤等)
- (10) 農薬の引退(失効)、まとめ

2 提出課題

2014 年度までに行った計 5 回の講義の受講生(のべ

Some Trials in Lectures on Pesticides and Several Description
Sentences by Students. By Kousuke SUYAMA
(キーワード: 農薬, 講義, 受講生, 記述文)